

# JELA NEWS

ジェラニュース 第16号 2008年8月15日発行 発行責任者 古川文江

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援/アジア子ども支援/ブラジル子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座/奨学金制度/宣教師支援

## 社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」  
マタイによる福音書 第25章35～36節



### 世界の子ども支援チャリティコンサート、過去最高の来場者数を記録

5回目となる「世界の子ども支援チャリティコンサート」(主催: JELA+JELC世界宣教委員会)は、JELC蒲田教会、田園調布教会、栄光教会藤枝礼拝堂、京都教会、西宮教会、シオン教会徳山チャペル、玉名ルーテル幼稚園、九州ルーテル学院、保谷教会の9会場で実施され、来場者総数は過去最高の1230名、献金総額も同様の129万円でした。ご協力有難うご

ざいました。

今回はじめて会場となった玉名ルーテル幼稚園の園児のお母様方から、たくさんの感想が園に寄せられましたので、その抜粋を3ページに掲載しました。親子ともども楽しんでいただけたようです。

**【この号にはこんな記事が】** 難民の日本での勉学を支援 他………2 第5回世界の子ども支援チャリティコンサート(玉名ルーテル幼稚園感想集)/JELA歴史コラム2「最初の礼拝」(長尾博吉)………3 インド・ワークキャンプ参加者の声と来年度募集要項………4・5  
ブラジルの子どもについて(ミハエル・ヘーン)他………6 患者さんから学んだこと(西野みゆき)他………7 お知らせ………8

# 難民の日本での勉学を支援

日本で難民認定された人を対象に、UNHCR(国連難民高等弁務官)駐日事務所は関西学院大学及び青山学院大学と提携して、難民高等教育プログラムという事業を数年前から実施しています。年間数名に、上記の大学での勉学の機会を提供する制度です。

JELAも、日本で難民認定された人が日本の大学や大学院で勉強できるよう、自前の奨学金制度を活用しています。その第一号である、ミャンマー出身のクー・エイミーさんへの学費支援は3年目に入りました。日本大学商学部のゼミでのリーダー的活躍、大学のクラブを通しての社会奉仕、そしてコンビニでのアルバイトをこなしながら、エイミーさんは来年以降の就職に向けて勉学に励んでいます。

この春にはまた、難民認定を受けているアフリカ出身の男性がJELA奨学金に応募しました。国際基督教大学(ICU)の入学試験に合格したので9月から学びたいけれども、アルバイトで生活費を稼ぐのが精一杯で、入学金や学費を支払う余裕がまったくないのです。さっそく関係者でインタビューをしたところ、素晴らしい好青年であることがわかりました。しっかりした学習目標を持っており、将来は国連やNGO等の国際支援団体に働くことを通して、マタイ福音書5章9節に記された「ピース

メーカー」(平和を

実現する人)になりたいとの抱負を聞かせてくれました。ほどなく



クー・エイミーさん

JELAの支援が決定し、入学金の支払い方法について本人と打ち合わせをしていたところ、なんと、ICUが入学金・学費・寮費を全額免除して受け入れることになったということではありませんか。驚きましたが、ICUが本人の資質を極めて高く評価した証拠であり、そのような人物への支援の是非を検討する機会を与えられたことに感謝しました。大学での専門的な勉強には、教科書・参考書等の書籍にかなりの費用がかかります。場合によっては、こういったものを支援することで、充実した勉強にJELAが側面から貢献できるかもしれません。数年後に彼の夢がかない、日本とアフリカの架け橋としての働き人、「ピースメーカー」になってくれるのを期待しています。(森川博己)

## ジェラハウスの難民一家に日本在留特別許可



4月発行のジェラニュースでお知らせした、ジェラハウスに滞在中の難民一家に在留特別許可が、5月19日に東京入国管理局から付与されました。クルド人にこの許可が与えられるのは珍しく、ニュースでも報道されました。前回の取材ですてきな笑顔を披露してくれた一家は、長年待ちこがれていた吉報に、ふたたび満面の笑みで応えてくれました。正規の在留資格を得たことで生活保護も受けられるようになり、一家はジェラハウスを離れてアパート暮らしをする予定です。ハウスの空き室には新たな難民申請者を受け入れますが、退室・入居の人それぞれの人生に潤いと平安と希望を少しでも提供できれば嬉しい限りです。



## 難民映画祭について

6月20日(世界難民の日)から27日にかけて、東京で、「第3回難民映画祭」が開催されました。選りすぐりの38作品が上映され、日頃知りえない難民の人々の歴史、実情、心情などがスクリーンに映し出され、一筋縄ではいかない複雑な問題ということを改めて考えさせられた映画祭でした。嬉しい驚きもありました。たくさんの人々が映画祭に足を運んでいたことです。土砂降りの雨の日曜日にNHKみんなの広場ふれあいホールで上映された、パレスティナ難民をテーマにした作品には500名以上の人がつめかけ、難民問題に対する予想以上の関心の高さに驚きました。上映後は、監督自ら舞台に立ち、撮影時の様子や、作品に対する想いなどを語ってくださり、映像の世界を現実の問題として感じることができました。

JELAは日本国内における難民支援をUNHCRや複数のNGOと協力して行っていますが、今後も様々な形で実際の支援と啓蒙活動に取り組み、その裾野を広げたく思っています。次回の難民映画祭では、JELAのホールを上映会場の一つに使っていただけないかとも考えているところです。来年の6月を楽しみにお待ちしております。





# ドキドキした! バイオリンってすごいね! ピアノを習いたい!

テッパー親子のチャリティコンサートに参加した玉名ルーテル幼稚園(熊本県)のお母様の声

♪ チャリティコンサートすばらしかったですね。下の娘にも聴かせてやりたかったです。息子も妹に「ドキドキした!」と興奮して話していました。また、このような機会を作って頂けたらと思います。

♪ 生演奏が聞いて感激いたしました。やっぱりいいですね、音楽は。いやされます。息子も目の前でピアノ、バイオリン演奏に心を打たれたようで、「すごかったね」と話し、家でもピアノを弾いていましたよ(乱演奏ですけど……)。

♪ 世界の様々な国の人たちのことを改めて知り、いろいろ考えさせられました。自分のことばかりでなく、周りの困っている人たちのことにも目を向けられるような人間に息子が育ってくれればと思います。

♪ 「あんな風に、弾きたいなあ」「バイオリンってすごいね」と、娘はとても感激したようです。音楽って楽しむことなんだ、と改めて思いました。

♪ とても素晴らしい演奏に鳥肌が立ちながら、うっとり最後まで聞かせていただきました。子ども向けの曲もたくさんあり、娘も「トトロが楽しかった」と話しておりました。そして「ピアノを習いたい」とも!! とても良い影響を受けさせていただきました。

♪ 子ども以上に私が楽しみにしていたチャリティコンサート。バイオリンの音色が大好きで、最後までうっとり聞かせていただきました。子どもたちもノリノリで、とても良い思い出になったと思います。

♪ CDを購入し、自宅でそれを聴きながらファミリーコンサート(おもちゃの剣をバイオリンにして)を開きました。来年もぜひ行ってほしいです。

♪ とても楽しめるコンサートでした。小さな子どもがいては、なかなかコンサートに行くことができませんが、このような機会が幼稚園で行われることに、とても感謝しています。大学時代、オーケストラでバイオリンを少しかじったことがあります。将来はテッパーさん親子のように、子どもたちと一緒に楽器を楽しみたいです。

♪ コンサート、すごく良かったですネ。初めて……聴いたような気がします。なかなかこんな風に聴ける機会がないので、いい経験をさせてもらいました。娘も帰りにず〜と、コンサートの話でした。

♪ テッパーさんの楽しいトークと、とても素敵な音色のバイオリンとピアノに感動しました。毎年、親子鑑賞会や芸術鑑賞として、生の演奏や影絵、草笛等、本当にいいもの

ばかりをルーテルには呼んでいただいて、親子共にいい経験をさせてもらっています。本当に感謝しています。

♪ 子どもたちも瞳を輝かせ、私も子どもと同様に心が弾みました。美しいものを聴く、見るということは本当に素晴らしく、子どもにもいろいろなことを体験させてやりたいと思いました。

♪ とても美しく、楽しく、いい笑顔の子どもたちにテッパーさん親子。音と一体になって、素敵な時間を過ごしました。静かなピアノ演奏をバックに活動のスライドを目にしたとき、思わず涙が出てしまいました。

また、九州ルーテル学院大学チャペルでのコンサートと、その前日にもたれたテッパー親子と九州ルーテル学院の音楽専攻の中高生との交流会が、以下の記事として熊本日日新聞紙上に上げられました。



## JELA歴史コラム その2

### 投石の中で守られた 最初のルーテル教会の礼拝



JELA常務理事  
長尾博吉

最初のルーサー宣教師シェーラーは、友人のブラッドベリーの招きに応じ、彼に代わって佐賀県立中等学校の英語教師に赴任しました。それは、日本人青少年に福音を伝える為の一つの手段であったからです。彼は、その英語教師の傍ら、彼の本来任務である福音宣教の職務に邁進しました。

しかし、外国人には誰も集会所を貸してくれないので、仕方なく彼は、佐賀市松原町明治通7番地に所在した無住の古民家(お化け屋敷と言われた)を借り受け、内部を改装して十字架教会と称して、1893年4月2日(イースター)に最初の礼拝を守ったのでし

た。その礼拝は、シェーラー、ペーリー両宣教師と山内量平牧師夫妻の4名に、日本基督教会の信徒数名という、10名足らずの集会であったようです。この仮会堂での礼拝は常に、外部からの投石と罵声によって妨害され続け、看板は一夜のうちに川に投げられ、仮会堂の門扉は外から杭を打ち付けられ、正に閉門の憂き目にあわせられたと云うことです。それでも最初の教会はそれに屈せず、礼拝を守り、市内4箇所講義所を開き、その宣教活動を推進したのです。そして翌年3月には一人の青年(26歳)の洗礼式が行われたのです。

やがて、ブラウン、ウインテル、リップードという3人の宣教師が加えられることにより、宣教戦線は熊本市、久留米市へと拡大されました。しかし、佐賀同様に、熊本でも集会所を借りることが難しく、当初7年間で集会所を8回移転の止むなきに至ったと記録されています。理由は「騒音はだめだ」という、正に偏見そのものだったようです。

これでは宣教はできません。それでミッ

ションボードの支援を得て、佐賀市(花房小路)と熊本市(水道町)に用地を購入し、教会堂を建設しました。佐賀教会の敷地は、宅地250坪で750円。建築費は建坪32坪で1200円であったと云われています。熊本の場合は、敷地購入費は宅地187坪で1500円。建築費は建坪38坪5合で2600円であったと記録されています。

ところが、当時は、まだ宗教法人法はなかったため、宗教資産の法的保全手段がなく、止むなく長老信徒数名の個人名義において共有資産として登記し、その保全を図らざるを得なかったのです。しかし、この宣教資産保全方法は、共有資産登記とはいえず、一部個人の共有資産に過ぎず、全教会員の共有資産とはなり得ず、ましてやその共有者の一部が欠けた場合どうなるのか。万一その共有資産が教会無関係者に相続されることになったら、将来に禍根を残すことにもなりかねません。このことが、当日本福音ルーテル団の前身である宣教師団の創設に起因しているのです。

第4回となる今回のインドワークキャンプは、参加者10名で実施しました。18歳以上で体力に自信のある人ならどなたでも参加できる奉仕キャンプです。キャンプ地はJELAが支援している、インド西部のジャムケッドという貧困地域です。貧しいかゆえに怪我の適切な治療を先延ばしにし、足を切断せざるを得ない人が多数存在するため、CRHP\*の病院関係者が簡易な義足を作成しています。JELAとJELCは、このキャンプ期間中に義足作成補助や子どもたちとの交流等を行っています。

\*注: CRHP=ジャムケッドで医療を中心に様々な開発事業に取り組んでいる、キリスト教を基礎にした組織「総合的地域健康プロジェクト」の英語名略称

## 人との出会いの多さ



岩尾夕紀・熊本県在住

義足作りのチームやその義足をもらいに来ている人達、レンガ作りの人達、小学校の先生や生徒達、CRHPの周りにいたたくさんの人達、CRHPのスタッフ。英語は話せないし、ヒンドゥ語はもちろん、マラティー語も話せないのが不安はあったのですが、言葉は分からなくてもジェスチャーだったり気持ちだったり、なんとなくだけ伝わるところはあり、子供達とはただ一緒に走り回ったりと体を動かすだけで通じ合っている気がしました。人との出会いの多さは観光旅行とワークキャンプの違いの一つかなと感じました。

## 体験を通しての気づき



江口奏実・熊本県在住

前回キャンプに参加した方々の協力でも、子どもたち一人ひとりにノート・定規・鉛筆をプレゼントすることが出来ました。子どもたちはとても嬉しそうで、本当に言葉では言い表せないくらい輝いていて……。私は、逆にそれが、悲しくなりました。その笑顔の裏

にある彼らの生活を感じたからです。「なくなれば買えばいい。」「別にいらない」と今まで思っていた物。それが、彼らにははるかに貴重な物となっていて、この子どもたちの背景を考えさせられると同時に、自分の恵まれた環境をはっきりと実感することが出来ました。

## 義足に込める祈り



高井太郎・函館教会

私の作業を近くで見ていた片足義足の男が、「むくつ」と立ち上がった。そして、バスケットコートの方に向かって歩き出す。遊んでいた子どもたちの前まで行き、ボールを要求し、受け取った。そして、次の瞬間、彼は軽く跳んだ。義足をはめた彼が、軽く跳んだ。そのまま、彼はボールを宙に放った。そして、そのボールは、バスケットゴールに向かって美しい弧を描いた。私はこの時初めて、義足をはめた、そして、これからはめるであろう彼らの、新しい人生に向かって歩き出す姿を思い描くことができた。私は祈る。「CRHPの人々の思いと、私の祈りがこの義足に通うように」と。

## 自分もこんな風に生きたい



山下丈太・京都教会

五体満足な体を駆使して走り回っている子供たちを見て純粋に笑っている、義足を待つ患者さん。自分が患者さんの立場だったらどう思うだろうか。子供がものすごい速度で走って、それを追いかけるように日本から来たメンバーが走りまわっている。ねたんでしまわないか、不快に思うのではないか。しかし、そこにいる患者の方はただただ微笑ましく笑っており、目の前で作業してくれているスタッフの働きに対して感謝の気持ちを持っていました。ここにすべての事を受け入れ、隣人を愛するという姿を見たような気がします。そこに神様の存在を感じました。自分もこんな風に生きたいと感じました。



## 第4回インドワークキャンプ 2008.2

## 新たななはじまり



山田麻衣・室園教会

インドから帰ってきて東京の街並みに立って、私はふと思いました。インドでのあの十日間を、どのように日本の生活の中で生かしていけばいいのかと。同じ地球なのに、同じ空の下で生きているのに、同じ時間を刻みながら生きているのに、何でこんなに違うんだろう、何をこんなに急いでいるんだろう。日本に帰ってきた直後は、日本という国がすごく愚かに思えてしまいました。日本の良いところが見えなくなっていました。キャンプの最後のデブーションで私は言いました。このキャンプの終わりは新たなスタートなのだ。神様に導かれてインドに行ったのなら、また新たなチャンスを神様は与えてくださると思います。

## 「インド」が見えだした瞬間



山下七瀬・京都教会

何かを得たい、自分の道を見つけない、そう思って参加したキャンプで私は日本人として生活し、インドを見ていました。そんな風に過ごしていたある日、空になった虫除けスプレー、日焼け止め、シャンプーなどのゴミを見



## キャンプ参加者の声 26~3.7

て、授業で習った「よき旅行者」の話を思い出し、捨ててはいけない、捨てられないと思いました。自分のスーツケースが軽くなることのために物を捨てて帰るのはだめだと思いました。そして私は気づきました。「日本人として世界を見ていては何も見えない」ということ。結局私はゴミを持ち帰ることになりました。その日から、前日以上にインドの人の優しさや、暖かさ、時間のゆるやかな流れや子供たちのキラキラした目に感動することができました。

### 信頼関係にもとづく医療実践



若松笑子・修学院教会

ジャムケッドの病院は、経済的に貧しく医師に診察してもらえない人々にも、開かれた病院として存在していた。独特な外壁や造り、周囲の薬臭、それに廊下にもベッドがあり患者が横たわっておられるのを見ると、まるで野戦病院のようであった。医師は白衣を着ていない。看護婦はサリーを着用している。多くの薬や検査・技術による不必要な医療社会から脱し、本当の事を聞きたくて、遠くから訪れる患者もある。顔と顔が向き合い、会話を通して信頼関係を築き深めているからである。病院とヘルス・ワーカーとの連携により、手遅れにならない治療に結びつけており、貧しい村の人々にも信頼関係を築くことによって必要な治療が提供できている。手術の技術の丁寧且つ手早さ・綺麗さに感激した。

### 全身で感じる「ありがとう」



松岡あゆみ・大岡山教会

患者さんの一人が車で私たちを施設まで送り届けると提案してくれました。義足で運転が出来るのかと不安に思いましたが、わたしの気持ちとは裏腹に、運転はとてもスムーズでした。義足贈呈で、その車で送ってくれた患者さんが、CRHPに対して感謝の気持ちをこめたメッセージを伝えはじめました。そのとき、私は心の底からその人に、「ありがとう」の気持ちを持ちました。義足を必要とする人たちが、どんな思いでCRHPの門をくぐったか、どんな思いで自分の新しい足の完成を待っていたか……不安で不安で仕方がないはず。「こんなど素人のわたしが作ってごめんなさい。」から、「こんなど素人のわたしをあなたの人生に関わらせてくれてありがとう」へ。全身が「ありがとう」の感謝の気持ちでいっぱいになりました。

### アイデアに満ちた働き



新井小百合・東京都在住

CRHPでは植物性エンジンの開発、牛糞を使ったバイオガス、農場では、乾燥した土地に適切な少量の水分で育つ植物やフルーツを栽培し、また土全体に水を与えるのではなく、植物の大きさから必要な水分量を計算して作物の根元に集中的に水を与える方法をとっています。女性にも小さい頃から、アクセサリ作りや農場の仕事(ミミズを使った肥料土を作る方法)などを教え、職を与えています。CRHPの活動はジャムケッドの村や人々の生活に深く根ざしており、細部までしっかり見渡した視点で物事を考えていて、素晴らしいアイデアばかりで驚かされました。CRHPの考え方は本当に先進的なもので、先進国で暮らす我々も学ばねばならない事が沢山あると痛感しました。

### 与えられた役割にむけて



石川恵美・田園調布教会

みんなの気持ちがかもった義足が完成し、贈呈式で一人ひとりに新しい足を渡していきました。新しい足を貰った患者さんたちは、杖などなしで再び歩けるようになったという喜びで、顔は笑顔で満ち溢れていました。そして、何よりも私の心を動かしたのが、贈呈式が終わって患者さんたちがそれぞれの家へと帰っていく後ろ姿を見た時でした。まだぎこちない歩き方をしていたけれど、新しい足をつけて自分の力で歩いている姿に本当に感動しました。義足を作る役割を与えられている人がいるように、私にもきっと神様から与えられている役割があると思います。まだそれが何か分からないけれど、探し続けていきたいと思っています。



キリストの手足となる

## インド・ワークキャンプ 参加者募集!



### 募集要項

派遣期間: 2009年2月24日(火)~3月6日(金) \*インド現地でのキャンプは7日間

募集対象: 18歳以上の健康な方

参加費: 15万円 \*パスポート、海外旅行保険、予防接種は自己負担です。

募集人数: 10名程度(選考があります)

必要書類: 定形の申込書及び所属教会牧師の推薦状(教会に所属していない方は、下記問い合わせ先にお尋ねください)

申込締切: 2008年11月2日必着

問合せ・申込先: 日本福音ルーテル教会事務局 宣教室(担当: 乙守望)

email: mission04@jelc.or.jp / Tel: 03-3260-1908 / FAX: 03-3260-1948



秋葉原で起きた無差別殺傷事件がメディアの見出しを占領しています。しかし、150万人とも言われる日系人がブラジルで生活しているにもかかわらず、日本

のメディアがブラジルの子どもを取り上げることはほとんどありません。悲しいことに秋葉原のような殺人事件はブラジルでは少なくとも1週間に1度は報道され、しかもそれは氷山の一角に過ぎません。ブラジルはまた貧富の差が極めて大きな国でもあります。

## ファヴェーラの脅威

母親と子どもが被害者となる暴力と虐待は、ブラジルでは陽が没するがごとく日常化し、国の将来に係わる深刻な問題となっています。世界的な人権擁護団体であるアムネスティ・インターナショナルの機関紙(2008年5月号)は、「逃げるか、殺されるか」という特別記事によりブラジルに焦点を当てました。記事は、犯罪組織の暴力の脅威から多くの家族がファヴェーラの家を捨てざるを得ない現状を伝えています。レシーフェ(ブラジル東海岸の都市)にあるファヴェーラ、サント・アマロの住人は、「警察は何の役にも立たない。ただ死体を集めるだけ」と言います。

## 犠牲者は子ども

義務教育であるにもかかわらず、ブラジルの子どもの就学期間はわずか4~5年と日本では考えられないレベルの低さです。基本的な勉強はもとより性教育にも何のケアもなく、状況は危機的です。父親がすべて違う8人の子持ちの母親もいます。多くの問題が山積するなか、ルラ大統領就任以来、子どもや社会的弱者の状況は少しだが改善しているという報告があるのが唯一の救いです。

## 日本の私たちにできること

日本は世界の中でも高水準の生活が許されている国です。しかし残念なことに、日本人びとは人権問題や開発途上国の貧困問題にあまり関心があるとは言えません。日本でアムネスティを支援する人は5千人

ほどですが、イギリスには25万人もいます。このことからJELAの世界の貧しい子どもたちを支援する働きは、パイオニアであると言えます。皆様はJELAを通してブラジルの子どもたちに愛の手を差し伸べ、ブラジルの教育福祉を支援しています。2003年に「ヘコンシリアサン」が優秀な福祉団体に与えられる栄誉あるカニッツ賞を受賞したのも、皆様の支援の果実と言えます。

## 一つの例

最近、一人の日本の女性が月4千円で世界の子ども支援を始めました。その数ヵ月後、彼女に職が与えられ、月20万円の収入を得るようになりました。神様は50倍もの恵みを備えてくださったのです。これは極めて

稀な例だと言われるかもしれません。しかし私は、皆様も多くの恵みを必ずや体験されると確信しています。私たちは神様の開拓者であり、キリストの愛の大使です。私はイエス様のみことばを信じます。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にするのは、わたしにすることなのである。」主の祝福が皆様の上に豊かにありますように。

## 【筆者紹介】

ミヒャエル・ヘーン。1957年ドイツ生まれ。ドイツ語教師・牧師。大阪・豊中在住。17年以上ブラジル支援に係わり、1997年には「プログラマ・コムニタリオ・ダ・ヘコンシリアサン」の子ども劇団を日本に招聘した。

## CEDELの第二校舎建築進む!

日本政府から約1千万円の援助金と、JELAから120万円の建築支援金をいただき、私たちは早速第二校舎の建築に取り掛かりました。工事は順調に進み、すでに壁と屋根ができてきました。子どもたちとスタッフは、完成を楽しみに待っています。神様と皆様に感謝します。(写真下)(CEDEL管理責任者 Eloi Peter)



## ジアデマ会堂・青少年センター建築 いよいよ着工

「もっと広い場所がほしい!」と長い間願っていたジアデマ集会の人々はついに6月22日(日)、サンパウロ教区長のギリエルメ牧師の司式のもと、夢と祈りが結実する定礎式の日を迎えました。ポルトガル語の聖書、当日の週報、定礎式出席者名簿、現在の通貨と当日のフォーリャ・デ・サンパウロ紙を敷地中央の石組みの中に納め、皆で喜び合いました。会堂・青少年センターは2階建ての計画ですが、手持ち資金の関係上、まずは1階部分(会堂とホール)が11月に完成する予定です。この建築計画には日本の皆様から総額250万円のご支援のお約束をいただいていることを覚え、心から感謝してご報告いたします。(写真下)(ジアデマ建築委員長・菅和夫/南米教員)



# 患者さんから学んだこと

西野みゆき(鴨川聖フランシス教会)

私は、リラ・プレカリア講座の第一期生として、2006年4月から18ヶ月の学びと実習を終え、昨年11月に修了証を頂きました。そして、神様の不思議な導きにより、昨年10月より、千葉県鴨川市にある、亀田総合病院の緩和ケアチームのボランティアとして、患者さんに、音楽を通して寄り添うことを許されています。毎週、水曜日の午後、緩和ケアチームの医師やチャプレンに大抵2人の患者さんを紹介して頂きます。亀田病院には、ホスピス病棟がないので、遭わされる直前まで、どこの病棟の患者さんを訪問するのかわかりません。患者さんを前にして、心を静めて向き合うことは私にとっては大変なことでした。でも、この環境が、私に、神に全てを委ねることを教えてくれました。詩編46編10節の「静まれ、わたしを神と知れ」が、私のリラを通して習慣になった毎日の黙想のテーマです。静まってはじめて、神に、自分にそして、目の前の患者さんに、耳を傾けて向き合うことができることを学びました。

リラでの学びの中で、よくキャロルさんが、「患者さんが一番の先生です。」と話され

ていましたが、その意味が良くわかりませんでした。でも本当に、働きを始めてみると、患者さんは、実に沢山のことを教えて下さいます。その先生達のことを少しお話をさせていただきます。

Aさんは、病状が進んで末期状態でした。痛みがあり、お辛い状態でした。教養のある方で、少し気難しいところがあるので、私の音楽を受け入れてくれるかどうかわからないと医師より聞かされていました。最初、Aさんは、目をじっと見開いて、私の方を見ていました。まるで、私を試しているかのような目でした。しばらくAさんの呼吸に合わせて導かれる曲を弾いていると、Aさんの表情が一瞬にして安らかな表情に変わり、呼吸が穏やかになりました。その後は目をとじて上を向かれ、じつと静かに音楽を聴いておられるようでした。終わった後、優しい顔をされて、「あなたの音楽は聞かせるものではなく、聞かされる音楽だね。途中で、自分が思っていた音楽でないわかと、気持ちがとても楽になったよ。」と話して下さいました。Aさんは、私に、決して患者さんの目から逃げないこと、呼吸に合わせて音楽を奏でることの大



切さを教えてくださった方でした。

先日、在宅の患者さんBさんのところへ遭わされました。厳しい状態の方と聞いていましたが、意識のはっきりとされた方でした。痛みを苦しまれておられました。音楽を奏で始めると、それまで緊張してこわばっていた体を、ゆったりと伸ばし始めたのです。終わってから、奥さんと、Bさんの体に手を当ててしばらく過ごしました。そこに居合わせた者皆にとって、とても静かな平和な恵みの時でした。Bさんは、子どものような安らかな顔をして眠られました。その二日後Bさんは、この世を去っていかれたそうです。

神は、この働きを通して、私に、神の愛のみ業を経験させてくださいます。心を開いて、神と人に向き合うことにより、私自身の魂が共に癒されていく幸いを実感するのです。この働きの陰に、多くの方のサポートと祈りがあることを思います。その皆さんの上に神の豊かな祝福をお祈りいたします。

## 最近のお便りから

◆ 私は、リラの働きの中から、愛を伝える事の大切さを身をもって感じています。亡き娘への思いや、後悔など沢山の感情を背負っていますが、ハーブや詩篇の響きに、フーと息がぬける感覚に気づき、はっとして、この働きがどんなに大切かを知りました。ベッドで横になっている方が、1つの弦の音から、歌声から心を開き、愛に包まれる時、リラ・プレカリアが生かされるのです。(第1期修了生)

◆ 訪問看護師のHさんは、リラ・プレカリアの公開講座に参加した際に、書籍「ハーブ・セラピー」を購入されました。その内容に心を打たれたHさんが、訪問看護に歌を取り入れた時のお話です。いつも訪問する86歳の方の看護の時、小学唱歌の「富士山」を歌いながら看護したそうです。「私は歌はうまくないし人前で歌うのは恥ずかしいけれど、看護の部屋にはおばあちゃんと私だけなのでちょっと歌ってみようかという気になったの」と言っていました。それでHさんが「あ～たま～をく～もおの～う～えに

～だあし～♪」と歌いながら看護(体を拭かれたりしたのでしょうか)していたら、いつもは呻くか「痛い」としか言わない方が一緒にちょっと歌ったそうなのです。それを聞いたご家族の方が「え～、おばあちゃんが歌ってる! 初めて聞いたわ～」と驚かれたそうです。歌を歌いながらの看護はとても気持ちよさそうだったそうです。Hさんは「これからも唱歌や童謡を歌ってみようと思う」と言っていました。私はこの話を聞いて、早速実践したHさんに感動し、音楽による癒しの力を間近に聞いて鳥肌が立ちました。こんな素敵な出来事を起こして下さった公開講座に本当に感謝します。(ゆっか)



## 最新ニュース

キャロル・サック宣教師のリラ・プレカリアの働きを紹介した記事がカトリック新聞(6月15日発行)に掲載され、反響を呼んでいます。痛みを苦しんでいらっしゃる患者さん本人から奉仕を受けたいというご要望をお受けしたり、地方からリラ・プレカリアを是非受講したいというお電話をいただいたり、リラ・プレカリアが徐々に浸透していることに喜びを感じる、と同時に、次なるステップ・アップのため、使命感を新たにしています。(N)

カトリック新聞 2008年6月15日 (西暦) (西暦) (西暦) 第3959号

### ハーブと歌で病苦和らげる

「痛みを和らげるハーブと歌」

米国福音ルーテル教会宣教師 キャロル・サックさん

「痛みを和らげるハーブと歌」

「痛みを和らげるハーブと歌」

「痛みを和らげるハーブと歌」

## リラ・プレカリア(祈りのたて琴)公開講座2008年～2009年

- 10月2日 詩編:人生における3つの時期 Carol Sack リラ・プレカリア(祈りのたて琴)責任者  
 10月23日 家なき人のホスピスの終末ケア 山本雅基 きぼうのいえ施設長  
 11月13日 プレーヤーズ・ピース(祈りの輪)ワーク・ショップ  
 長谷川(間瀬)恵美 南山大学宗教文化研究所非常勤研究員(神学博士)  
 1月22日 娘の死から学んだもの 藤井礼子 「死を恐れる人たちへ」かみを受容した娘の生き方」著者  
 1月29日 音楽死生学-着想の拠所- 里村生英 エリザベト音楽大学音楽化学科准教授  
 2月5日 恥の神学的考察 大柴譲治 日本福音ルーテルむさしの教会牧師  
 2月19日 祈りのシヨール(アメリカの教会の動き) 麻理・McKenzie ELCA宣教師  
 終末ケアの体験から 若林節子 山谷きぼうのいえボランティア  
 2月26日 統合医療の可能性 鈴木康之 訪問鍼灸マッサージ師  
 3月12日 ハープの歴史 Peter Reis Harps Unlimited Internationalの創設者・代表  
 3月19日 「弓と禅」とミニ・コンサート  
 Rebecca Flannery ハープ演奏者/教授(Hartt School of Music, University of Hartford, Connecticut)

会場:恵比寿ジェラ・ミッション・センター1階

時間:午前10時30分～正午(午前10時15分開場)

聴講費:¥1,000(11月13日のみ別途教材費 ¥700)

問合せ:JELA事務局(中島)まで

本講座で使用するテキストの一つ『ハープ・セラピー』(ステラ・ベンソン著、神藤雅子訳、春秋社、CD付)が好評発売中です。購入ご希望の方はJELA中島まで。



教会/玉名ルーテル幼稚園/柘植ハル/堤重敏/鳥居和代/永田のぶこ/中道本枝/西立野園子/西平薫/萩原耕介/早瀬康平/平田幸子/平林洋子/福田陽子/藤井浩・礼子/藤橋日出子/淵田康穂/古川文江/星野幸子/松澤貞子/松嶋俊介/丸山君子/南節子/宮崎真実/宮澤真理子/牟田青子/むさし野教会/毛利庄蔵/森保宏/山県順子/山崎恵美子/山本一男/若原奇美子/渡辺映子/Augustana Lutheran Church/Charity Hall/Patrick Bencke 他匿名複数名

### ● 賛助会費

阿波田絹子/安藤淑子/石澤とし子/内田一士/大澤朝子/太田滋子/大谷忠雄・妙子/大中真理/岡本弘志/京谷信代/倉知延章/小泉潤/桜井永之/三五康子/周田裕芳/高橋佳子/高橋悠美子/瀧原哲/塚本和夫/中村雍子/仲吉智子/本多順一/松嶋俊介/ 他匿名複数名

以上、敬称略。ご協力ありがとうございます。

なお、匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

## 今年もアジア学院(ARI)留学生に奨学金を支給します



アジア・アフリカ農村指導者養成専門学校アジア学院の留学生

2人に、今年も奨学金を支給することになりました。

インドネシア出身のジュンピター・ハホー

ラン・パツパハンさん(27歳・写真左)は、ARIで無農薬農法を習得し、それを彼の支援する農家に定着させるのが目標です。同じくインドネシア出身のガニ・シラバンさん(32歳・写真中)は指導員として環境を破壊しない農法及び、最小のコストで最大の収穫を得ることを目的とした農地管理について地元農家の人々へ基礎から教えています。中川理事長(写真右)と古川事務局長は入学式に列席し、彼らを祝福しました。

## NCC世界祈祷日献金がJELAに

6月上旬にNCC(日本キリスト教協議会)女性委員会より、JELAのアジアとブラジルの子ども支援活動に対して、世界祈祷日での献金のうち10万円を頂戴いたしました。世界祈祷日は毎年レントに世界各国においてまもられ、昨年は『神の天幕のもとに結ばれて』をテーマに、世界各地でパラグアイの女性たちを覚えて祈りがささげられました。この礼拝でささげられた献金963万円は、JELAなど合計31の組織・団体の活動への支援金として送金されました。

## 支援者一覧

(2008年3月1日～6月30日)

### ● 各プログラム支援献金

アメリカ福音ルーテル教会/荒井悌次郎/和子/石崎勝/石澤とし子/石田浩子/石原勇/石原寛/泉亮・洋子/市ヶ谷教会/井上新/上原文子/ウォータマン・ジュリー/内海初子/大塚真佐子/岡部瑞子/小川幾代/加藤久子/上窪松子/亀岡紀代子/川上範夫/吉川幸子/京谷信代/釧路教会/倉重ミドリ/グリテベック・ローウェル/児島和子/小菅可代/桜井永之/斯波健一/杉浦りえ/鈴木春江/鈴木やす/関口佳子/関本憲弘/千石真理/高田敏尚/高田紀子/高津和子/高橋寿子/高安洋子/玉名

## 編集後記

NHK朝のテレビ小説『瞳』に、庶民家庭に里子として預けられている子どもたちが登場します。その中の中学三年の優秀な男の子が、あるとき学校のテストを白紙で提出し、自分は就職すると言いだします。進学することで里親に経済的負担をかけたくなかったのです。事情を察した「父親」が、『つまらぬ心配するな。お金のことは大丈夫だ。もつと甘えろ』と抱きしめるシーン。思いやりにあふれた二人の心情が伝わり、感動的でした。日本で難民と認められても、満足のゆく職が得られないことから経済的余裕が生まれず、高等教育機関で学ぶ夢をあきらめる人がいます。本国で絶たれた勉学の道を、できるなら日本で継続したいことでしょう。JELAが奨学金制度を通じて、このような人たちにも支援の手を差し伸べることができる幸いに感謝を覚えたいではありません。(M)

**JELA**  
Japan Evangelical Lutheran Association  
日本福音ルーテル社団